目次

第一講　演習問題㊀・㊁・㊂……p. 2
第二講　演習問題㊀・㊁・㊂……p. 12
第三講　演習問題㊀・㊁・㊂……p. 22
第四講　演習問題㊀・㊁・㊂……p. 32

第一講　演習問題 一・二・三

一　次は、具平親王作の「早秋に『秋は簟上より生ず』を賦す」と題する詩である。よく読んで、以下の各問に答えなさい。

秋至微涼①未足驚
初従簟(注1)上②漸応生
一身③暑気施未去
八(注2)尺商風展得□
暁後弥知煙(注3)竹滑
日中更愛④露花瑩
炎天与⑤汝相親久
莫恨⑥秋深月自軽

（『群書類従・第八輯』「本朝麗藻巻上」抜粋・一部改変）

注1　簟――細く割った竹をむしろのように編んだ夏季用の敷物。
2　八尺商風――八尺の長さの簟に吹いてくる秋風。
3　煙竹――靄に濡れた竹。

問一　傍線部①・②を、それぞれ平仮名で書き下しなさい。

①＝

②＝

問二　傍線部③「暑気」・④「露花」と対比されている語を、詩の中から抜き出して、それぞれ答えなさい。

③＝

④＝

問三　空欄□に入る最も適切な語はどれか。次の選択肢ア～エから選びなさい。

ア　響（ひびく）　　イ　激（はげしき）

ウ　清（すずしき）　　エ　強（つよき）

問四　傍線部⑤「汝」とは何を指すか。次の選択肢ア〜エから選びなさい。

ア　篁　　イ　一身　　ウ　暁　　エ　炎天

問五　傍線部⑥の内容として最も適切なものを、次の選択肢ア〜エから選びなさい。

ア　秋が深まると、月が一段と風情を増してゆくので、夏に見た月の記憶が薄まるように感じられる。
イ　秋が深まると、夏の間親しんだものたちの存在は忘れ去られ、月が何よりも慕わしく感じられる。
ウ　秋が深まると、涼しさに空気が研ぎ澄まされるせいか、月がなんとなく冷酷なものに感じられる。
エ　秋が深まると、一年の残りの月日が少なくなってくるので、時間の流れがあっけなく感じられる。

二　漢の高祖は晩年、呂夫人が生んだ皇太子を廃して、戚夫人の子を新たな皇太子に立てようとした。呂夫人は危機感を覚え、建国の功臣、張良（留侯）に策を求めた。張良は高祖がかつて側近に迎え入れようとしてできなかった四人の賢者（商山の四皓）を使って、高祖の心を変えさせる策を授けた。次の文章は、張良の策が実行に移され、「四皓」が高祖に面会した場面である。

漢十二年、上従リ㆘撃‐破シテ黥(げい)布(ふ)ノ軍ヲ㆒帰リシ㆖、疾(a)益ミ甚ダシク、愈ミ欲ス㆑易(b)ヘント㆓太子ヲ㆒。留侯諫(いさ)ムルモ、不㆑聴カ、因リテ㆑疾(a)ニ不㆑視㆑事ヲ。叔孫太(たい)傅(ふ)称シテ説キ引㆓古今ヲ㆒、以テ㆑死ヲ争フ㆓太子ヲ㆒。上詳(いつは)リテ許スモ㆑之ヲ、猶ホ欲ス㆑易(b)ヘント㆑之ヲ。及ンデ㆑燕スルニ、置キ㆑酒ヲ、太子侍ス。四人従ヒ㆓太子ニ㆒、年皆八十有余、鬚(しゅ)眉(び)皓(かう)白(はく)、衣冠甚ダ偉ナリ。上怪シミ㆑之ヲ、問ヒテ曰ク、「[1]彼何為者」。四人前ミテ対ヘ、各ミ言フ㆓名姓ヲ㆒。上乃チ大イニ驚キテ曰ク、「吾求ムルコト㆑公ヲ数歳ナルニ、公辟(さ)ケテ逃ル㆑我ヨリ。今公何ゾ自ラ従ヒテ㆓吾ガ児ニ㆒游ブ乎ト」。四人皆曰ク、「陛下軽ンジ㆑士ヲ善ク罵ル。臣等義トシテ不㆑受ケ㆑辱(はづか)シメヲ、故ニ恐レテ而亡(に)ゲ匿(かく)ル。窃(ひそ)カニ聞ク太子[2]為㆑人ト仁孝、恭敬ニシテ愛シ㆑士ヲ、[3]天下莫不延頸欲為太子死者、故ニ臣等来ル耳ト」。

（『史記』留侯世家による）

（注）上……漢の高祖劉邦を指す。
黥布……漢の高祖劉邦が項羽を破るのを助けた武将の一人。漢の統一後、劉邦に対し謀反を起こしたが、失敗し殺された。
留侯……張良のこと。
叔孫太傅……側近の一人、叔孫通のこと。「太傅」は、皇太子の守り役。
詳……ここでは、本音を隠して認めた振りをすること。
燕……宴会を開く。
鬚眉皓白……あごひげと眉が真っ白いこと。

問一　波線部ａ「疾」は、二度用いられているが同じ意味である。それと同じ意味で用いられている「疾」を含む熟語を、次の中から一つ選べ。

イ　疾走　　ロ　疾患　　ハ　疾徐　　ニ　疾風

問二　波線部ｂ「易」は、二度用いられているが同じ意味である。それと同じ意味で用いられている「易」を含む熟語を、次の中から一つ選べ。

イ　簡易　　ロ　難易　　ハ　軽易　　ニ　交易

問三　傍線部１「彼何為者」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

イ　彼らはいったいいかなる者たちだ。
ロ　彼らはなぜ皇太子に従っているのだ。
ハ　彼らはいつどこからやって来たのだ。
ニ　彼らは何の目的でここに呼ばれたのだ。
ホ　彼らはなぜあのような格好をしているのだ。

問四　傍線部２「為人」の読みとして最も適切なものを、次の中から一つ選べ。

イ　ひととなせば　　ロ　ひとをさむるに
ハ　ひとのために　　ニ　ひとたりて
ホ　ひととなり

問五　傍線部３「天下莫不延頸欲為太子死者」は、「この世の誰もが首を長くして太子のために身命をささげたいと思っています」という大意である。この大意に沿う読み方として最も適切なものを次の中から一つ選べ。

イ　天下莫㆑不㆑延㆑頸欲㆘為㆓太子㆒死者㆖
ロ　天下莫㆑不㆘延㆑頸欲㆗為㆓太子㆒死㆖者
ハ　天下莫㆚不㆘延㆑頸欲㆗為㆓太子㆒死㆖者㆙
ニ　天下莫㆚不㆘延㆑頸欲為㆓太子㆒死㆖者㆙
ホ　天下莫㆚不㆑延㆑頸欲㆘為㆓太子㆒死㆖者㆙

問六　漢の高祖は最終的に皇太子を廃することを思い止まった。それでは、張良の策略とは、はたしてどのようなものであっただろうか。次の中から最も適切なものを一つ選べ。

イ　高祖が尊敬してやまない四人の賢者に、招聘を拒絶した真の理由を語らせて、高祖に己の人格的欠点を理解させ、皇太子を廃することがその傲慢さによるものであることを悟らせて、翻意を促すというもの。

ロ　高祖がかつて招聘しようとしてできなかった四人の賢者を呼び寄せ、彼らに高祖に対する世俗の悪評を語らせるとともに、今の皇太子を廃することがどれほど非道なのかを説かせて、翻意を促すというもの。

ハ　かつて招き寄せようとして拒絶された四人の賢者と高祖とを自然に引き合わせ、病状が悪化して弱気になっている高祖の心の隙間をねらって、賢者の高潔な人柄と考えに触れさせることで、翻意を促すというもの。

ニ　高祖に、己の不徳ゆえに招き寄せることのできなかった四人の賢者が皇太子にうやうやしく付きしたがっている様を見せつけ、さらに賢者の口から皇太子の人望の厚さを説かせて、翻意を促すというもの。

ホ　反乱軍鎮圧の疲労と体調の悪化により、ますます専横を強める高祖に対し、慎重の上にも慎重を重ねて、彼が全幅の信頼を置く四人の賢者を登場させ、彼らに腰を低くして説得させ、翻意を促すというもの。

三　次の文章を読み、後の設問に答えよ。なお、設問の関係で、送りがなを省いたところがある。

杭州ノ戒壇焚毀ス。Ａ朝命㆓ジテ浙江ノ布按両司㆒ニ重建セシム。Ｂ所㆑費甚広。因リテ召㆓シ湖州ノ呉汝輝・嘉興ノ曹艮等数人㆒ヲ、勧募ス。汝輝入リテａ見エ、請ヒ㆓問フｂ幾何㆒ナルカヲ。方伯曰ハク、「度（はか）ルニ得㆓バ銀万両㆒ヲ則チ可ナラント。」汝輝曰ハク、「願ハクハ一力モテ当㆑タラント之ニ。」憲長ノ楊継宗曰ハク、「Ｃ何ゾ易キコト若㆑キ此クノ。得㆑無㆑キヲ誑（たぶら）カスコト耶ト。」汝輝曰ハク、「民ニ有㆓リ一子ノ不肖㆒ナル。雖モ有㆑リト所㆑積ム、死後必ズ為㆓ラン他人ノ所㆑ト取㆒ル。Ｄ何㆔‐如（いづ）レゾヤト奉㆓‐承スルニ勝事㆒ニ。」時ニ両司ノ官皆在リ、聞㆑キテ之ヲ称嘆ス。

（『寓圃雑記』による）

〔注〕　杭州＝地名。　戒壇＝戒壇院。仏教徒に戒律を授ける式壇がある寺院。　浙江＝省（地方行政区画）の名。省都は杭州。
布按両司＝布政府と按察司という、ふたつの役所。省ごとにおかれた。長官はそれぞれ布政使と按察使。
広＝多い。　湖州・嘉興＝浙江省の地名。　呉汝輝・曹艮＝人名。　勧募＝寄付を募る。　方伯＝布政使のこと。
一力＝独力。　憲長＝按察使のこと。　楊継宗＝人名。　民＝ここでは一人称。　所積＝蓄積した財産。
何如＝比べていかがであろうか。　奉承勝事＝仏事に寄進する。

問一　傍線部Aを、口語訳せよ。

問二　傍線部Bを、全文ひらがなで書き下し文にせよ。

問三　二重傍線部a・bの読みを、ひらがなで記せ。

a＝　　　　b＝

問四　傍線部C「何易若此。得無誑耶」とあるが、楊継宗がこのように考えたのはなぜか。わかりやすく説明せよ。

問五　傍線部D「何如奉承勝事」とあるが、呉汝輝がこのように考えたのはなぜか。わかりやすく説明せよ。

第二講 演習問題 一・二・三

一 次の文章を読んで、後の（1）〜（5）に答えよ。

周有申喜者、亡(注一)其母。A［聞乞人(注二)歌於門下］而悲之、動(注三)於顔色。謂門(注四)者内乞人之歌者、自見而問焉、曰、「何故而乞。」B［与］之語、蓋其母也。

故父母之於子也、子之於父母也、一体而両分、同気而異息。若草莽之有華実也、若樹木之有根心(注五)也。C［雖］異処而相通、隠(注六)志相及、痛疾相救、憂思相感、生則相歓、死則相哀、此之謂骨肉之親。神(注七)出於忠、而応乎心、D［両精相得］。E［豈待言哉］。

（『呂氏春秋』精通篇より）

（注一）亡…ここでは「生き別れる」の意。
（注二）乞人…乞食、ものごい。
（注三）動於顔色…顔色にまであらわれる。
（注四）門者…門番。
（注五）根心…根や芯。
（注六）隠志…憂え痛む心。
（注七）神出於忠…霊妙な思いが心の奥底から発出する。

（1）二重傍線部B「与」、C「雖」の読み方を答えよ。

B＝　　　　C＝

（2）傍線部Aの書き下し文は、ひらがなで「こつじんのもんかにうたふをききて」となる。これに合うように、漢文に正しく返り点と送りがなを付けよ。

聞　乞　人　歌　於　門　下

（3）傍線部D「両精相得」について、ここの「精」は「精神、たましい」を、「得」は「一体となる」を意味する。では「両精」とは具体的に何を指すか。その答えとして、次の［①］と［②］に適当な語句を挿入せよ。

［①］の精と［②］の精

①＝　　　　②＝

（4）　傍線部E「豈待言哉。」について、①書き下し文にして、すべてひらがなで記せ。②また、その日本語訳として正しいものを、次のア～エの中から選べ。

ア　なぜ言うのを待たねばならないのか。
イ　言うまでもないことである。
ウ　言葉を待つことができる。
エ　言わないではいられない。

①＝

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。（設問の都合上、返り点・送り仮名を省いた箇所がある）

袁随園宰江寧。城中韓姓女為風吹至銅井村。離城九十里。村氓次日送女還家。女已嫁東城李秀才子。李疑風無吹人九十里之理、必有姦約。控官退婚。袁暁(1)之曰、「古有風吹女子至六千里者。汝知之乎」。李不信。取元郝文忠公『陵川集』、示之曰、「郝公一代忠臣。(2)豈肯作誑語者。第当年風吹呉門女、竟嫁宰相。(3)恐汝子無福耳」。李読詩大喜。両家婚配(4)如初。是知聴訴者当博古也。

（陸以湉『冷廬雑識』による）

注
袁随園…清の袁枚。
江寧……地名。
里……約五七六メートル。
村氓…村民。
嫁……縁組をすること。
控官……役場に訴えを起こすこと。
退婚……縁組を取り消すこと。
郝文忠……人名。
誑語……でたらめな話。
呉門……蘇州のこと。
聴訴……訴えを裁くこと。
博古…昔のことに詳しいこと。

問一　傍線(1)「之」が指すものとしてもっとも適当なものを左の中から選びなさい。

A　韓姓女　　B　村氓　　C　李秀才
D　李秀才子　　E　官

問二　傍線(2)「豈」の読みを、送り仮名も含めて全て平仮名で書きなさい。（平仮名以外に何も書かないこと）

問三　傍線(3)「恐汝子無福耳」は「なんぢがこふくなきをおそるるのみと」と読む。これに従って、原文に返り点を付けなさい。（返り点以外に何も書かないこと）

恐　汝　子　無　福　耳

問四　傍線(4)「如レ初。」の解釈としてもっとも適当なものを左の中から選びなさい。

A　もとのままになった。
B　なかったことにした。
C　最初からやり直した。
D　昔の例と同様だった。
E　詩とそっくりだった。

問五 本文の内容に合致するものを左の中からひとつ選びなさい。

A 袁枚は、人が風で飛ばされる距離として、六千里より九十里の方が現実的だと考えていた。
B 訴えを起こした人物は、袁枚の該博な知識に基づく説得の結果、自分の非を悟るに至った。
C 袁枚は、博識によって、訴えを起こした人物を納得させるだけの判断を下すことができた。
D 韓氏の娘は、李秀才の息子と夫婦になれば、自分が夫の将来の出世に役立つと信じていた。
E 袁枚は、銅井村の村民と韓氏の娘の不適切な関係を隠すために、過去の伝説を持ち出した。

三　次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。ただし、設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した部分、および文字を改めた箇所があります。

汝*南有於田得鹿者、(1)其主未往取也。商車十余乗*経沢中行、望見此鹿著縄、因持去。(2)念其不事、持一鮑*魚置其処。有頃、其主往、(3)不見所得鹿、反見鮑魚。沢中非人道路、怪其如是、大以為神、転相告語。治病求福、多有効験、因為起祀*舎、衆巫数十、帷*帳鍾鼓。方数百里皆来禱祀、号鮑君神。其後数年、鮑魚主来歴祠下、尋問其故、曰、「此我魚也、(4)当有何神。」上堂取之、遂従此廃。伝曰、「(5)物之所聚、斯有神。」言人共奨*成之耳。

（『風俗通義』による）

＊汝南――地名。今の河南省。

＊乗――車を数える単位。
＊鮑魚――塩漬けの魚。
＊祀舎――ほこら。
＊帷帳鍾鼓――とばりやかね・たいこ。
＊奨――あがめて、お供え物をする。

問一 傍線部(1)「其主未往取也」を、すべて平仮名を用いて読み下しなさい。

問二 傍線部(2)「念其不事」は、車の主が、何もしていないのに鹿を手に入れたことを気にして、という意味で、「其(そ)の事(つと)めざるを念(おも)ひ」と読みます。この読みに従って、漢文に返り点と送り仮名を付けなさい。

念 其 不 事

問三 傍線部(3)「不見所得鹿、反見鮑魚」を現代語訳しなさい。

問四　傍線部(4)「当有何神」を現代語訳しなさい。

問五　傍線部(5)「物之所聚、斯有神」とはどのような意味か。この文章の内容に即してわかりやすく説明しなさい。

第三講　演習問題 一・二・三

一　次の文章を読んで、後の設問に答えよ。（＊は本文の後に注があることを示す。また、設問の都合で送り仮名を省いたところがある。）

金粟園後有蓮池二十余畝、臨水有園、楮樹叢生焉。予欲置一亭納涼。或勧予「此不材木也、宜伐之而種松柏」。予曰、「松柏成陰最遅、予安能待。」或曰「種桃李。」予曰、「桃李成陰、亦須四五年。道人之跡如遊雲。安可枳之一処。予期目前可作庇陰者耳。」楮雖不材、不同商丘之木、嗅之狂酲、三日不已者。蓋亦界于材与不材之間者也。以為材、則不中梁棟桁櫨之用、以為不材、則皮可為紙、子可為薬、可以染繒、可以頮面、其用亦甚夥。

（袁中道「楮亭記」より）

〔注〕
＊金粟園＝筆者の所有する庭園。
＊楮樹＝コウゾ。クワ科の落葉低木。
＊叢生＝群がって生える。
＊寘＝置く。
＊材＝材木として用いることができるもの。
＊道人＝道を求めて修行している人、または道を得た人。
＊跡＝ゆくえ。
＊枳＝ミカン科の落葉灌木（かんぼく）。
＊庇陰＝木陰。
＊商丘之木＝商の丘に生える大木。その形状や性質のため、人間の役に立たない。『荘子』の記述を踏まえる。
＊狂酲＝悪酔いする。
＊界＝境界に存在する。
＊梁棟枅櫨＝家の骨組に用いることのできる材木のこと。
＊頮＝洗う。

問一 二重傍線部ａ・ｂ（ｂは二箇所ある。）の読みを、送り仮名も含めて答えよ。（現代仮名遣いでよい。）

ａ＝

ｂ＝

問二 傍線部①「此」が指すものを、本文中から抜き出せ。

問三 傍線部②「予安能待」を現代語訳せよ。

問四 筆者が「楮樹」を植える理由を二つ挙げよ。

二　次の文章を読んで、後の問に答えよ。

王子猷居山陰、夜大雪。眠覚、開室、命酌酒、四望皎然。因起仿偟、詠左思招隠詩。＿A忽憶戴安道＿。時戴在剡。即便夜乗小船就之。経宿方至。造門不前而□。人問其故、王曰、「吾本乗興而行、興尽而返。＿B何必見戴＿」。

（『世説新語』より。出題の関係上、返り点・送り仮名の一部を省略した）

（注）王子猷……王徽之。子猷は字。王羲之の第五子。　　山陰……地名。会稽郡山陰県。

皎然……白く明らかなさま。　　左思……詩人の名。字は太沖。

招隠詩……当時流行した詩の題名。清浄な自然界に隠棲する者へのあこがれを綴ったもの。

戴安道……戴逵。安道は字。隠者。　　剡……剡山。現在の浙江省の地名。

経宿……一夜を経て。

問一　傍線部Ａ「忽憶戴安道」とあるが、なぜ戴安道のことを思ったのか。その理由として最適なものを、次の中から選べ。

1　隠者の友人と興をともにしたくなったから。
2　招隠詩の解釈について隠者の友人と議論したくなったから。
3　隠者の友人が酒好きだったことを思い出したから。
4　あまりの大雪に山奥に住む隠者の友人の安否が気遣われたから。
5　隠者の友人が山奥でどんな暮らしをしているのか興味を持っていたから。

問二　空欄□を補う最適な漢字一字を本文中から抜き出せ。

問三　傍線部Ｂ「何必見戴」の書き下し文として最適なものはどれか。次の中から選べ。

1　何（なに）を必ず戴に見せんや
2　何（いづ）れぞ必ず戴と見（まみ）ゆべきは
3　何（いづ）くんぞ必ず戴を見るは
4　何（なん）ぞ必ずしも戴に見（まみ）えんや
5　何（いか）にも必ずしも戴を見るべきか

問四　王子猷の言動を評したものとして、**ふさわしくないもの**を、次の中から一つ選べ。

1　奔放不羈　　2　融通無碍　　3　自由自在
4　風流韻事　　5　豪放磊落

三　次の文章は、孟子と斉の宣王との問答である。これを読んで、後の問いに答えなさい（設問の都合で本文中の返り点、送り仮名を省略したところがある）。

孟子曰「臣聞之胡齕。王坐於堂上。有牽牛而過堂下者。王見之曰『牛何之』。対曰『将以釁鐘』。王曰『舎之。吾不忍其觳觫若、無罪而就死地』。対曰『然則廃釁鐘与』。曰『何可廃也。以羊易之』。不識有[1]諸」。曰「有之」。曰「是心足以王矣。百姓皆以王為愛也、臣[a]固知王之不忍也」。王曰「然。誠有百姓者。斉国雖褊小、吾何愛一牛。即不忍其觳觫若、無罪而就死地。故以羊易之也」。曰「王無異於百姓之以王為愛也。以 A 易 B 、彼[b]悪知之。王[2]若隠其無罪而就死地、則牛羊何択焉」。王笑曰「是誠何心哉。[3]我非愛其財而易之以羊也。宜乎百姓之謂我愛也」。曰

「無レ傷カレ(いたムコト)也。是レ乃チ仁術也。見テレ牛ヲ未ダレ見レバレ羊ヲ也。君子之於ケル二禽獣一ニ也、見テハ二其ノ生ヲ一不レ忍ビレ見ルニ二其ノ死ヲ一。聞レキテハ其ノ声ヲ一不レ忍ビレ食ラフニ二其ノ肉ヲ一。是以(c)君子ハ(4)遠ザクル二庖(ほう)厨(ちゅう)ヲ一也ト」。

（『孟子』梁恵王上）

（注）
○胡齕―斉の宣王の近臣。　○釁鐘―鐘などを鋳造したとき、いけにえを殺し、その血を塗るという呪術的な儀式。
○觳觫若―オドオドとおびえるさま。　○百姓―多くの人々。群臣ないし民衆。　○愛―物惜しみする。
○褊小―狭く小さい。　○異―不思議に思う。怪しむ。　○隠―憐れむ。同情する。
○傷―気に病む。憂える。　○仁術―思いやりのある振る舞い。　○庖厨―台所。調理場。

問一　傍線1について、「諸」が指している内容として最も適当なものを次の中から一つ選びなさい。

ア　王が、堂上から見おろしていたとき、堂下をいけにえの牛が通ったということ。
イ　王が、鐘を鋳造したときに動物の血を塗る儀式を実施せよと命じたということ。
ウ　王が、いけにえとして殺される動物を牛の代わりに羊にせよと命じたということ。
エ　王が、鐘を鋳造したときに動物の血を塗る残酷な儀式を中止させたということ。

問二　空欄A と B に入る最も適当な語を、それぞれ次より選びなさい。

イ　善　　ロ　低　　ハ　悪　　ニ　大　　ホ　小　　ヘ　高

A＝　　　　B＝

問三　傍線2について、孟子の主張を説明しなさい。

問四　二重傍線a～cについて、読み方をそれぞれ平仮名で書きなさい（現代仮名遣いでもよい）。

a＝　　　　b＝　　　　c＝

問五　傍線3は、「我其の財を愛みて之に易ふるに羊を以てするに非ざるなり」と読む。この読み方に従って、返り点をつけなさい（送り仮名は不要）。

我非愛其財而易之以羊也。

問六　傍線４について、王のとった行動に対して孟子がこのように言った理由を説明しなさい。

第四講　演習問題 一・二・三

一 次の文章を読んで、問いに答えよ。（設問の都合で送り仮名・返り点を省いたところがある。）

魏文侯問李克曰、「呉之[a]所以亡者、[b]何也。」李克[c]対曰、「数戦数勝。」文侯曰、「[A]数戦数勝、国之福也。其所以亡、何也。[/A]」李克曰、「数戦則民疲、数勝則主驕。以驕主治疲民、此其所以亡[d]也。」是故好戦窮兵、[B]未有不亡者也。[/B]

（『新序』による）

（注）魏――中国古代の国名。
文侯――魏の君主。
李克――文侯の臣下。
呉――中国古代の国名。

問一　傍線部a「所以」・b「何也」・c「対」・d「也」の読みを、送り仮名を含めて、すべて平仮名で記せ。現代仮名遣いを用いてもよい。

a＝　　　　b＝

c＝　　　　d＝

問二　傍線部A「数戦ヒテ数勝ツハ、国之福也。其ノ所㆓以ナルハ亡㆒ブル、何也」をわかりやすく口語訳せよ。

問三　傍線部B「未㆑有㆓不㆑亡者㆒也」をすべて平仮名で書き下し文にせよ。現代仮名遣いを用いてもよい。

問四　春秋時代に呉と激戦を繰り返し、呉を滅ぼした国はどこか。その国名を漢字一字で答えよ。

二　次の文章は、司馬遷の『史記』を評論したものである。これを読んで、後の問いに答えなさい。ただし、問いの都合で返り点・送りがなを省いた部分がある。

太史公叙帝王、則曰本紀。公侯伝国、則曰世家。公卿特起、則曰列伝。此其例也。其列孔子為世家、(1)奚其進退無所拠耶。孔子旅人也。棲棲衰季之世、無尺土之柄。此列之以伝(X)宜矣。(a)曷為世家哉。(Y)豈以仲尼躬将聖之資、其教化之盛、舄奕万世、故為之世家以抗之。又非極摯之論也。夫仲尼之才、帝王可也。(b)何特公侯哉。仲尼之道、世天下可也。(Z)何特世其家哉。処之世家、仲尼之道、不従而A。置之列伝、仲尼之道、不従而B。而遷也自乱(c)其例。所謂多所抵牾者也。

（『臨川先生文集』）

（注）　○太史公―漢代の歴史家、司馬遷。後にある「遷」も同じ。　○公侯伝国―諸侯で領地を世襲する者。
○公卿特起―士大夫などで特別な人生を送った者。　○悽悽哀季之世―道義の衰えた時代にあわただしく働きかける。
○尺土之柄―少しばかりの領地。　○仲尼―孔子の字(あざな)。　○躬将聖之資―聖人に近い資質を自分で磨く。
○曷奕万世―永遠に輝く。　○極摯之論―最適な議論。　○世天下―天下を受け継ぐ。　○抵牾―くいちがう。

問一　波線部(X)～(Z)の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

(X)　宜
ア　まさにすべし　イ　よろしくすべし　ウ　むべなり
エ　のぶるなり　オ　いかんせん

(Y)　豈
ア　なほ　イ　けだし　ウ　およそ
エ　もし　オ　あに

(Z)　何特
ア　なんぞただに　イ　なんのとくぞ　ウ　なにをもつて
エ　いづれのひとり　オ　いづくのことに

問二 二重傍線部(1)の解釈として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア どうすれば、孔子の生き方を模範として、歩んで行けるだろうか
イ どうして、司馬遷が孔子の人生を、高く評価したのだろうか
ウ 何と、孔子の伝記の配置には、根拠がないものか
エ 何としても、孔子の伝記を、列伝に置きたいのだろう
オ どうしたら、孔子のような判断力を確立できるのだろうか

問三 傍線部(a)の送りがなを含めた読み方として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア なんぞ なすに せいかをや
イ なんぞ せいかと なさんや
ウ いづれの ために せいかなるかな
エ いづれか せいかを なさんとす
オ なにか せいかの ためにせん

問四　空欄[A]・[B]に入る語の組み合わせとして最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　A　難・B　易
イ　A　動・B　静
ウ　A　内・B　外
エ　A　日・B　月
オ　A　大・B　小

問五　傍線部(b)の解釈として最もふさわしいものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　どうしてただ諸侯に過ぎないだけなのだろうか
イ　どうすれば特例として諸侯になれるだろうか
ウ　どうか特別に諸侯にしてほしい
エ　どうしても特異な諸侯となってしまう
オ　どういうわけで一人だけ諸侯なのか

問六　傍線部(c)の内容に合致するものを、次のア～オの中から一つ選びなさい。

ア　「其例」とは、比喩のことで、孔子を永遠の旅人になぞらえている。
イ　「其例」とは、基準のことで、本紀・世家・列伝の収録の目安である。
ウ　「其例」とは、実例のことで、実際に孔子が生きた時代の事件である。
エ　「其例」とは、法令のことで、筆者の時代と司馬遷の時代の違いである。
オ　「其例」とは、類似のことで、司馬遷と孔子の考え方が近いことである。

問七　本文の内容に合致するものを、次のア～キの中から二つ選びなさい。

ア　孔子は天下を取りたかったが、結局はむなしく多くの諸侯に遊説しただけで、亡くなってしまった。
イ　孔子は単なる旅人に過ぎず、その伝記を本紀に収録したのは、万人の敬意の表れであった。
ウ　孔子は諸侯であったのに、それが天下には知られていなかったので、司馬遷が訂正した。
エ　筆者は、孔子の道の偉大さから考えれば、その伝記を司馬遷が世家に収録したのは、不当であったと考えている。
オ　筆者は、司馬遷が執筆の原則を自ら混乱させたことを、非難している。
カ　筆者は、孔子の伝記を収録するなら、本紀にすべきであったと考えている。
キ　筆者は、孔子も司馬遷も同じ伝記の中に収録すべきだと考えている。

三　次の文章は、唐代の柳宗元が、「蝜蝂（ふはん）」という虫と対比しながら、ある種の人々について、自分の意見を述べたものである。よく読んで、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、返り点・送り仮名を省略したところがある。）

蝜蝂者、善負小虫也。行遇物、輒持取、卬其首負之。背愈重、雖困劇不止也。其背甚渋、物積因不散、①卒躓仆②不能起。人或憐之、為去其負。A苟能行、又持取如故。又好上高、極其力③不已、至墜地死。

今世之嗜取者、遇貨不避、以厚其室、不知為己累也、B唯恐其不積。及其怠而躓也、黜棄之、遷徙之、亦以病矣。苟能起、又不艾。日思高其位、大其禄、而貪取滋甚、以近於危墜、観前之死亡、不知戒。雖其形魁然大者也、其名人也、而智則小虫也。亦足哀④夫。

（『柳宗元集』による）

注　渋……なめらかでなく、物がすべり落ちにくいさま。
貨……財貨。　　　室……家の財産。　　　累……わざわい。
怠……注意をおこたる。　　　黜棄……捨てさる。　　　遷徙……移す。
病……くよくよ悩む。　　　危墜……危険。
前之死亡……以前に、高い位や財貨を貪ったがために死ぬに至った人。
魁然……大きいさま。

問一　傍線部①〜④の文中における読み方をすべて平仮名で記しなさい。（仮名遣いは新旧どちらでもよい。）

①＝　　　②＝　　　③＝　　　④＝

問二　傍線部Aを口語訳しなさい。

問三　傍線部Bを書き下し文に改めなさい。ただしすべて平仮名で記しなさい。

問四　二重傍線部「又」は、「［ア］ということに加えて、また［イ］ということもある」、という関係を示している。この場合のア、イの内容についてそれぞれ簡潔に説明しなさい。

ア＝

イ＝

問五　作者は、人間はどうあるのが望ましいと考えているのだろうか。簡潔に述べなさい。

模範解答

【第一講】

〔模範解答〕

一

問一　①　いまだおどろくにたらず　②　やうやくまさにしやうずべし

問二　③　商風　④煙竹　問三　ウ　問四　ア　問五　イ

二

問一　ロ　問二　ニ　問三　イ　問四　ホ　問五　ハ　問六　ニ

三

問一　朝廷は浙江省の布政司と按察司に命令して（杭州の戒壇院を）再建させ（ようとし）た。

問二　つひやすところはなはだひろし

問三　a　まみ（え）　b　いくばく（なるかを）

問四　個人一人の力で戒壇院の再建をすることは不可能だと考えたから。

問五　愚かな息子なので、自分の死後、必ず財産を他人に取られることになるだろうから、それなら戒壇院の再建のため寄進するほうがよいと判断したから。

〈現代語訳〉

一

秋になって少し涼しくなったが、まだ驚くほどではない
最初は夏用の敷物の上から、だんだんと（秋の気配が）生じるはずだ
身体の暑さは、（秋がなんとかしようと）施してもまだなくならないが
八尺の長さの夏用の敷物に吹いてくる秋風は、（力を）発揮して涼しさを感じられる
夜明けの後に、ますます露に濡れた竹が光沢をはなっているのを知る
日中は、さらに露に濡れた花が輝いているのを愛でる
暑いときには、お前〔＝簟・夏用の敷物〕と長く親しんだ
恨むなよ、秋が深まると月（が何よりも慕わしく感じられること）に（より）自然と軽んじられることを

二

漢の十二年、高祖劉邦は黥布の軍を撃破して帰ったときから、病気がますます重く、ますます皇太子を交代させようと思った。留侯〔＝張良〕が諫めたが、聞かず、病気のせいで政務を行わない。叔孫太傅〔＝叔孫通〕が意見を述べて古今を引用し、死ぬことを覚悟で皇太子の件を論争した。劉邦は本音を隠して認めた振りをして叔孫太傅の言うことを聞き入れたが、やはり皇太子を交代させようと思った。宴会を開いたとき、酒盛りをし、皇太子が傍に控えた。四人が皇太子に従っており、年齢はみんな八十歳過ぎで、あごひげと眉が真っ白く、衣冠はとても立派である。劉邦が彼らのことを不思議に思い、質問して言うには、「彼らはいったいいかなる者たちだ」と。四人は前に進み出てお答えし、それぞれ姓名を言う。劉邦はそこでとても驚いて言うことには、「私があなたたちを求めるのが数年になるが、あなたたちは私を避けて逃げた。今あなたたちはどうして私の子に従って楽しんでいるのか」と。四人全員が言うことには、「陛下は立派な人物を軽んじてよく罵ります。私たちは道義として辱めを受けず、だから恐れて逃げ隠れたのだ。ひそかに聞くと、皇太子の人柄は思いやりがあり孝行で、恭しく立派な人物を愛し、この世の誰もが首を長くして太子のために身命をささげたいと思っていて、だから私たちは来たのだ」と。

三

杭州の戒壇院が焼けて壊れた。朝廷は浙江省の布政司と按察司に命令して（杭州の戒壇院を）再建させ（ようとし）た。かかる費用はとてつもなく多い。よって、湖州の呉汝輝・嘉興の曹艮たち数人を呼んで、寄付を募った。汝輝が（役所に）入って謁見し、どれくらいかかるのか質問した。布政使が言うには、「計算すると銀万両があれば可能だろう」と。汝輝が言うことには、「（私の）独力でこれに当たりたい」と。按察使の楊継宗が言うことには、「どうして簡単にそのようであるか。冗談だろう」と。汝輝が言うことには、「私には一人の愚かな子がいる。蓄積した財産があるが、（私の）死後必ず他人に取られるだろう。仏事に寄進することと比べていかがであろうか」と。そのとき、布政司と按察司の役人がみんなそこにおり、これを聞いて感心した。

【第二講】

〔模範解答〕

一

（1）B と　C いへども

（2）聞ｷﾃ㆔乞人ﾉ歌ﾌｦ㆓於門下ﾆ㆒

（3）① 父母　② 子（順不同）

（4）① あにいふ〔げん〕をまたんや　② イ

二

問一　C　**問二**　あに　**問三**　恐㆓汝子無㆑福耳㆒

問四　A　**問五**　B

三

問一　そのあるじ〔ぬし／しゅ〕いまだゆきてとらざるなり

問二　念ﾋ㆓其ﾉ不㆑ﾙｦ事ﾒ

問三　手に入れた鹿は見当たらず、かわりに塩漬けの魚があった。

問四　どんな神であるというのか、神などであるはずがない。

問五　ただの塩漬けの魚が「鮑君神」として祀られて信仰されていたように、本当は違っていたとしても人が神だと信じて人やお供え物が集まると、本当に神として祀られることになるという意味。

〔現代語訳〕

一

周に申喜という者がいた。申喜は母と生き別れた。（申喜は）乞食が門前で歌うのを聞いてこのことを悲しみ、顔色にまであらわれる。門番に言って乞食で歌うものを入れさせて、自ら会って乞食に質問して、言うことには、「どういう理由で乞食になったのか」と。乞食と話していると、自分の母親であった。

よって、父母は子に対して、子は父母に対して、一体で二つに分かれ、（源は）同じ気であって呼吸は別である。草に花や実があるように、樹木に根や芯があるようなものである。場所は違うが心は通じ、憂え痛む心が通じ、痛みや病気はお互いに救い、辛い気持ちを感じあい、生きていれば喜び合い、死んでは悲しむ、これを骨肉の親という。霊妙な思いが心の奥底から発出して、心に応じ合い、二つ〔＝父母と子〕のたましいは一体となる。言うまでもないことである。

二

清の袁枚は江寧を治めていた。町内の韓姓の娘が風に吹かれて銅井村に着いた。町から九十里離れていた。村民は次の日娘を送って家に帰した。娘は既に東城の李秀才の子と縁組していた。李（秀才）が疑うのは風が人間を吹いて九十里（まで飛ばした）という道理はなく、必ず（銅井村の人間と）不適切な関係があると。役場に縁組を取り消す訴えを起こした。袁枚が李秀才を諭して言うことには、「昔、風が女子を吹いて六千里まで着いたことがある。あなたはこれを知っているか」と。李秀才は信じない。元の郝文忠公の『陵川集』を取り、彼〔＝李秀才〕に見せて言うことには、「郝公はその時代の忠臣である。どうしてすすんででたらめな話を作ることがあるだろうか、いや、ない。ただ今年、風が蘇州の女を吹いて、（その吹き飛ばされた先で）宰相と縁組をしたが、（そのように風に吹かれた女は幸せになる要素を持っているのに、縁組を取り消したいという）あなたの子に幸福がないことを心配するだけだ」と。李秀才は詩を読んでとても喜んだ。両家の縁組話はもとのままになった。訴えを裁く者は当然昔のことをよく知っておかなければいけないことがわかる。

三

　汝南に田で鹿を捕らえた者がいて、その主人はまだ行って取っていなかった。商人が車十台以上で沢の中を通って行くときに、この鹿が縄につながれているのを遠くから見て、そこで持ち帰った。何もしていない（のに鹿を手に入れた）ことを気にして、一匹の塩漬けの魚を持ってきてそこに置いた。しばらく経って、その主が行くと、手に入れた鹿は見当たらず、かわりに塩漬けの魚があった。沢は人の（行き来する）道ではなく、このようになっていることを不思議に思い、強く神だと思い、何度も（多くの人に）告げて語った。病気を治し福を求めるときに、たくさんの効験がある（と噂になり）、よってほこらを建てて、数十人の巫女、とばりやかね・たいこを整える。百里四方の人が皆、祈り祀りに来て、鮑君神と名付けた。その数年後、塩漬けの魚の持ち主がほこらを訪ねて来て、その由来を尋ねて言うことには、「これは私の魚だ。どんな神であるというのか、神などであるはずがない」と。堂に登って魚を取り、とうとうそれから廃れた。言い伝えとして、「物が集まる所に、神がいる」と。その意味は人が一緒にあがめて、お供え物をすると神ができるというだけなのである。

【第三講】

〔模範解答〕

一

問一　a　いえども　　b　すなわち

問二　楮樹

問三　私はどうして待つことができようか、いや、待てない。

問四　すぐに涼を取りたいことと、薬などの生活用品として役に立つこと。

二

問一　1　　**問二**　返　　**問三**　4　　**問四**　3

三

問一　ウ　　**問二**　A　ホ　　B　ニ

問三　罪もないのにいけにえとして殺されるのがかわいそうと思うならば、牛も羊も同じはずなので、宣王の判断はおかしいと主張している。

問四　a　もとより　　b　いづ〔ず〕くんぞ　　c　ここをもつ〔っ〕て

問五　我 非下愛二其 財一而 易レ之 以上羊 也

問六　実際に見た牛を哀れに思い、羊を代わりにしようとした宣王の行動は、君子が、生き物が殺されるのが我慢できないので台所を遠ざける思いやりの気持ちと同じだと考えたから。

〔現代語訳〕

一

金粟園の裏に、二十数畝の蓮池があり、水に面して庭園があり、コウゾがそこに群がって生えている。私はあずまやを置いて涼を取ろうと思った。ある人が私に勧めるには、「これ（＝コウゾ）は材木として用いることができない木で、これを伐採して松や柏を植えるのがよい」と。私が言うには、「松や柏が木陰を作るのは一番時間がかかる、私はどうして待つことができようか、いや、待てない」と。ある人が言うには、「桃や李を植えよ」と。私が言うには、「桃や李は木陰を作るには、四、五年かかるだろう。道を求めて修行をしている人のゆくえはちぎれ雲のようだ。どうしてからたちが同じところにいる（ように、私も同じところにいる）ことができようか、いや、できない。私は今すぐ木陰ができる木が欲しいだけだ」と。コウゾは材木として役には立たないが、商の丘に生える大木が（同じく役に立たないと言われているが）、この香りをかぐと悪酔いして、三日間なおらないのと同じではない。思うに、また（コウゾは）材木として用いることができるものとできないものの境界に存在するのである。材木として用いることができるのかと考えると、家の骨組に用いることのできる材木ではなく、材木として用いることができないのかと考えると、皮から紙を作ることができるし、種は薬にすることができ、絹を染めるのにも使えるし、洗顔にも仕えたりと、その用途はとてつもなく多いのである。

二

王徽之が山陰にいたとき、夜たくさん雪が降った。眠りから覚めて、部屋の戸を開け、命令して酒を注がせたところ、一面が白く明らかな様子である。よって起きてあたりをさまよい、左思の招隠詩を吟詠した。突然戴逵のことを思い出した。その時戴逵は剡山にいた。すぐに夜に小船に乗ってそこに向かう。一夜を経て到着した。門に着くと進まないで引き返した。人がその理由を尋ねると、王徽之が言うには、「私はもともと興に乗って行き、興が尽きたので帰った。どうして必ず戴逵に会わなければいけないのか、必ずしも会わなくてよい」と。

三

孟子が（斉の宣王に）言うことには、「私はこれを胡齕（＝斉の宣王の近臣）に聞いた。王が堂上に座っていた。牛を牽いて堂の下を通り過ぎる者がいた。王がこれを見て言うことには『牛はどこに行くのか』と。答えて言うには『鐘を鋳造したので、これからいけにえとしてこの牛を殺して、その血を塗る儀式がある予定です』と。王が言うには『これを（いけにえにするのは）やめよ。私は牛がオドオドとおびえていて、罪がないのに殺されるのは（かわいそうで）耐えられない』と。答えて言うには、『それならば、鐘に血を塗る儀式をやめましょうか』と。（王が）言うには『どうしてやめることができようか、いや、できない。羊を牛の代わりとせよ』と。本当にこんなことがあったのですか」と。（王が）言うには、「あった」と。（孟子が）言うには、「この心は王たる者として十分です。人民はみな王が物惜しみをしたと考えているが、私は言うまでもなく王が耐えられなかったことを理解しています」と。王が言うには「その通りだ。本当に（そう考えている）人民もいる。斉の国は狭く小さいが、私はどうして一頭の牛を惜しむだろうか、いや、惜しまない。牛がオドオドとおびえていて、罪がないのに殺されるのが耐えられないのだ。だから羊を牛の代わりにしたのだ」と。（孟子が）言うには「王よ、人民たちが王が物惜しみをしたと考えているのを不思議に思いなさいますな。小さいもの（＝羊）を大きなもの（＝牛）の代わりにしたので、彼らがどうしてこれ（＝王様がかわいそうだと思ったお考え）をわかるでしょうか、いや、わからない。王が、もし罪がないのに殺されることに同情したならば、牛と羊とどうして選べるだろうか、いや、（違いはないので）選べない」と。王が笑って言うには「本当に（あの時の私は）どういう心だったのだろうか。私は財産が惜しくて羊を牛の身代わりにしたのではないのだ。当然だなあ、人民が私が物惜しみをしたと言うのも」と。（孟子が）言うには「気に病みなさいますな。これは思いやりのある振る舞いである。牛は（実際に殺される予定の牛を）見たが羊は見ていないからである。君子は鳥や獣に対して、生きているところを見たら殺されるのを見るのは耐えられないのです。鳴き声を聞いたらその肉を食べるのは耐えられないのです。こういう理由で、君子は調理場を遠ざけるのである」と。

【第四講】

〔模範解答〕

一

問一　a　ゆゑ〔え〕んの　　b　なんぞや　　c　こたへ〔え〕て　　d　なり

問二　何度も戦って、何度も勝つのは、国にとって幸いなことである。それなのに呉が滅びた理由は、どうしてか。

問三　いまだほろびざるものあらざるなり　　**問四**　越

二

問一　(X)　ウ　　(Y)　オ　　(Z)　ア

問二　ウ　　**問三**　イ　　**問四**　オ

問五　ア　　**問六**　イ　　**問七**　エ・オ

三

問一　①　つひ〔い〕に　　②　あたは〔わ〕ず　　③　やまず〔やめず〕　　④　かな

問二　もし（蝜蝂は）前に進めるようになったならば、ふたたび前のように物を背負う。

問三　ただそのつまざるをおそるるのみ。

問四　ア　物を何でも背負うのが上手である

イ　高いところに登るのが好きである

問五　身の丈以上の高位や財貨をむさぼらないのが望ましいと考えている。

〔現代語訳〕

一

魏の君主の文侯が臣下の李克に質問して言うことには、「呉の国が滅びたのは、どうしてか」と。李克がお答えして言うことには、「何度も戦って、何度も勝ったからです」と。文侯が言うには、「何度も戦って、何度も勝つのは、国にとって幸いなことである。それなのに呉が滅びた理由は、どうしてか」と。李克が言うには、「何度も戦えば、民は疲れるし、何度も勝てば君主は思い上がる。思い上がった君主がつかれた民を治めたのが、これが滅びた理由です」と。こういうわけで戦を好んで武力を尽くした国は、いまだ滅びないものはないのである〔＝必ず滅びた〕。

二

司馬遷は帝王のことを述べると、本紀という。諸侯で領地を世襲する者を、世家という。士大夫などで特別な人生を送った者を、列伝という。これはその（『史記』の）基準である。司馬遷が孔子について世家とするのは、何と、孔子の伝記の配置には、根拠がないものか。孔子は旅人〔＝諸国を遊説した人物〕である。道義の衰えた時代にあわただしく働きかけ、少しばかりの領地もない。孔子を列伝に入れるのが当然である。どうして世家としたのか、いや、おかしい。仲尼〔＝孔子〕が聖人に近い資質を自分で磨いて、その教えが盛んで、永遠に輝き、だから孔子を世家としてそして孔子を持ち上げたのか。また（これも）最適な議論ではない。そもそも孔子の才能は、帝王並みだと考えられる。どうしてただ諸侯に過ぎないだけなのだろうか。孔子の教える道は、天下を受け継ぐ帝王の教え並みだと考えられる。どうしてただ領地を世襲する諸侯の教えに過ぎないだけなのだろうか。孔子を世家に入れても、孔子の教える道は、（そうすることに）よって大きくならない。列伝に入れても、孔子の教える道は、（そうすることに）よって小さくならない。だが司馬遷は自分でその基準〔＝本紀・世家・列伝の収録の目安〕を乱している。いわゆるくいちがう所が多い（と言われている）ものである。

三

蝜蝂は、物を背負うのが上手な小さな虫である。前に進んで物に出会うと、いつも持って取って、頭をあげてこれを背負う。背中はどんどん重く、苦しいことが激しくなってもやめないのである。その（虫の）背中はとても物がすべり落ちにくく、物を摘んでも散らばって落ちることがないことにより、とうとうつまずいて倒れて立つことができない。人がこれをかわいそうに思い、虫のために背負っているものを取り除く。もし（蝜蝂は）前に進めるようになったならば、ふたたび前のように物を背負う。また高い所に登るのが好きで、その力も限界までやり尽くして止まらず、地に落ちて死んでしまう。

今の世の中で物を取ること好きな者は、財産にあっても避けず、その家の財産を増やし、自分のわざわいとなることもわからずに、ただ（財産が）増えないのではと恐れているだけだ。そういう者が注意をおこたりつまずいてから、これ〔＝財産〕を捨てさり、これ〔＝財産〕を移して、またくよくよ悩む。もし起きることができれば、また（財産を増やすことを）やめない。日々、自分の位を高くして、俸禄を増やすことを考えて、むさぼり取ることがますます大きく、危険に近づいて、以前に、高い位や財貨を貪ったがために死ぬに至った人を見たことがあるのに、戒めとすることを知らない。その形は大きく（小さな虫に比べたら）巨大な者で、その名は人間というが、その見識は小さい虫である。悲しむのに十分であろうなあ。

Ⓒ RECRUIT
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。